

Essay

ヒルデガルト研究ノート (二)

石 井 誠 士

5. 「生活の規矩」

生命は、もともと否定の契機を含んで成立している。生と一つに死がある。生きるということは、いつも死と共に、死に向かって、生きるということである。それが被造性の本質である。神の創造的世界において、存在は単純な存在ではなく、無の上に振動する存在である。生命は、病まいと不可分である。生きるということは、病みつつ、さらに、死につつ生きるということであり、人間は、この、病みつつ、死につつ生きる生を引き受けて、自覚的に生きなければならない。ここに、個々の人間の存在の無限な課題性がある。その際、健康 *salus* の問題は、そのまま、救いの問題であり、したがって、決して信仰から切り離すことができない。近代的世界の人間は、そういう身体的実存のリアリティーから遊離しており、したがって、癒しの可能性を見失っている。だが、癒されるということは、単に身体や精神の疾患の克服ではなく、その中に本質的に病むことや死ぬことをも含んだ人間の、さらには、世界の存在者全体の本来的な在り方の実現に関わっている。

人間は、健康な生を、「生きた秩序」 *ordo vitalis* を、実現するために、根本的に、指導を、日常のごく平凡なこと、すなわち、飲食や着衣や住居から、性、睡眠、さらに排泄に到るまでの、「生活の規矩」 *regula vitae* を必要とする。ヒルデガルト・フォン・ビンゲンは、この点を、極めて具体的に、厳密に考えている。

日々の経過において、すべては、規則づけら

れた、調和をなすリズムに従わねばならない。労働と休息、食と断食、語ることと沈黙すること、目覚めることと眠ることなど、それらは、私たちの日常なすことであるけれども、生命に本質的なリズムをなしている。人間の労働と休息とは、神が、創造において、六日間働かれ、七日目に休息されたことに基づき、これを象徴しているのである。それ故、人は、労働と休息のリズムを整えることにより、彼の生活を規則づけることができると共に、さらにその内的意味に目を転ずることによって、永遠なものの直視へと向かうようになる。

ヒルデガルトは、住居や着衣について、さらに飲食について、精細な指示を与えている。その際、彼女は、特に、まだからだが生々しく、一本の木のように真っ直ぐに成長することが期待される若い修道者のことを配慮している。若者は、肉体的にばかりでなく、精神的にも、安定に向かって、恒常性、つまり、継続的な「習慣の変革」 *conversio morum* へと、成熟していかなければならない。だが、成熟は、ある閉じた環境の静寂の中で守られる恒常性によってのみ、可能である。ヒルデガルトは、世俗を離れた修道院の生活の意義を、この点に見いだすのである。

日常生活において、人間の交わりはいかにあるべきか。彼女は、キリスト教の原理にしたがって、人は、常に、「あたかもキリストご自身がそこにいたもう如く」、彼が私たちの真只中にいたもう如く、振る舞うべきである、と言う。人となりたもうた神であるキリストといつも共

にあるということが、人と人との間の基本原理になる。そのようにして、人は、絶えず、隣り人に人間性 *humanitas* を、認めるべきである、他人と対話する場合にも、また、日常生活上のいろんな煩雑な問題に向かうときも。

しかし、「あたかもキリストご自身がそこにいたもう如く」ということは、単に、キリストを超越的な他者として仰ぎ、模範としてまねぶことを意味しないであろう。それは、むしろ、日々に出会う一人一人の人に、対立するのでもなければ、ただ一体になるのでもない、一人の人を認めることである。あるいは、キリストが、苦しむ者、病める者の友でいられたように、身近に病み、苦しんでいる人がある場合に、その病み、苦しむ人の中に、直ちに、人となった神を見ることを意味している。彼女の時代には、一人一人の病む人をいたわることが、神に仕えること、つまり教会でさまざまな儀礼をすることよりも、重視された。神は、人と自然に対して超越的であるよりも、むしろ、一々の人に、否、むしろ、人と人との間の動的関係に、現在するのである。

6. 癒しと救い

ヒルデガルトの場合には、癒しの問題と救いの問題、医術と信仰とは、切り離すことができない、と語った。このことは、ヒルデガルトの医術において、癒しの有効な手段が、技術的処置や薬剤投与に置かれていなかったことを意味している。

それでは、彼女がもっとも優れた癒しの手段と考えたものは何であろうか。人が病気から癒えるためにすべき一番重要なことは何か。

それは、「改悛」*paenitentia* である。回心、存在の全体的根本的革新である。しかし、これは、現代の人間には理解できないし、受け入れにくいことであるかもしれない。だが、ヒルデガルトにとっては、このことは、むしろ、ごく自然な、当然なことであった。彼女は、常に彼女の生涯と思想の主題をなした、人間の「改悛」、すなわち、人間が単純に自己の存在の原点に帰

って、そこから立ち上がって生きること、神から与えられた最高の処方を見たのである。私たちが病むということは、私たちが神に背いていることであって、それは、私たちが私たち自身の生命の根源から、あるいは、私たち自身から、自ら離れていること、離れ続けていることを意味している。

ここに人間の根本の問題がある。

生命自体がそうであるが、特に人間の生命は、全体として、動態をなす。それは、人間が「神の作品」としての宇宙の中の一被造物でありながら、宇宙の中心をなし、神に対し、また、同時に、他者に対し、そして、全宇宙に対し、その都度具体的に応答しなければならない、責任を有する存在者だからである。

応答は、具体的に、全存在でなされるべきである。ヒルデガルトの著作で、私たちは、至る所に、ためいき *gemitus*、嘆き、涙 *lacrimae*、悲しみ *moeror*、すすり泣き *supirium*、動揺といった言葉に出会う。「ちょうど、主の足下にひれ伏して泣いたマグダラのマリアのように、真実な改悛の涙によってみずからの罪を洗い落とした人は、もはや何も恥ずる必要はない」と、彼女は言う。

ここでは、生命は身体と別に考えることはできない。ドイツ語の *Leben* は、もともと *Leib* と同一語源の語である。多くの宗教や哲学では、精神を身体から区別し、真の生命は、身体を否定し越える精神の作用にある、と考えた。特に、中世は、身体を軽んじた時代と見られる。近代でも、デカルトにおいて顕著に見られるように、精神と身体二元論は徹底されて、生命を原理的に否定するところまで進んだ。だが、私たちの自覚からすると、生命を身体から切り離す思考は、抽象的である。生きるということは、身体的であるということである。ヒルデガルトは、ヨハネ福音書冒頭の「言葉は肉になった」を、現実の人間一人一人の存在の意味として捉える。そして彼女は、「からだと魂とは、それぞれ性質を異にするけれども、共に唯一の作品 *unum opus* として存在する。かくして、人間

もまた、全く具体的な在り方をして生きている。つまり、人間は、上も下も、外も内も *et supra er subtus, circa er intra*、徹底的に、身体 *corpus ubique* としてある。そして、これこそ、まさに人間の在り方である。*et hoc modo est homo.*」と語っている。この故に、世界の中の人間の生活は、まさしく、癒しを、ドイツ語のいわゆる *Heil* をめぐるの身体的な対話として現われる。人間は、自らの癒しと救いについて、責任がある。病気は、自らが、神と他者と環境との関係を自ら攪乱することから起こるのである。生と死、病気と苦しみ、危機と煩悶など、人生のすべては、人間の全体の存在において捉えなければならない。だから、身体的な問題は、直ちに精神的な問題であり、さらに、関係性の問題であり、そして、それは、結局、存在全体の根拠との関係と関係している。生と共にその否定性としての病気や死、仏教的に言えば、「生・老・病・死」が、既に超越を志向しているのであり、そのようにして、一切のものが、救いと癒しに向かって存在しているのである。

7. 被造性

現代ドイツの優れた医史学者であるハインリッヒ・シッパージェスは、『創世紀』や『ヨハネ福音書』の記述の独創的解釈とも見られるヒルデガルトの人間像を、構造的に、三つの局面に分けて捉えている。すなわち、人間は、

1. 「神の作品」 *opus Dei*
2. 「他者のための他なる作品」 *opus alterum per alterum*
3. 「被造物と共にある作品」 *opus cum creatura*

である。

ここで、重要なことは、まず、これら三つの局面に共通する *opus* の理解である。被造性、特に人間のそれをどう受け止めるか。

ヒルデガルトは、人間を、どこまでも、「神の作品」 *opus Dei* として、神の被造物として、受け止める。人間は、成長し、成熟し、かつ協

働するために、神により創造されたものである。この、人間を *opus* として、被造性として「受け止める」ということに、人間の存在の限りなく深まりゆく意味、その運命と自由とがある。

opus ということは、身体的であるということである。身体は、全一的である。しかもその全一的なものが働く。身体は、活動する全一的なもの、すなわち、宇宙である。

私たちが被造物である点では、神は、まさしく私たちの身体を通して働く。「言葉が肉になった」ということは、人間が、「頭のとっぺんから足の先まで」“*de capite ad pedem*” 神の救いの働きの媒体であるということである。徹底的に被造的である。しかもそれを自覚するからして、創造的である。パスカルの言うように、人間は「考える葦」である。人間は、自らが死ぬことを、宇宙が自らを優越していることを知るが故に、偉大である。徹底的に必然であるが故に、そして、そのことを自覚することにおいて、自由である。

8. 性の意味

ところで、この、「神の作品」としての人間は、抽象的一般的な人間ではない。いかなる人も一人だけであることはないし、純粋な絶対的な存在者であることもない。常に、極めて具体的な人、個人、つまり、この人であり、あの人であり、しかも、この人はあの人と共にあり、あの方はこの人と共にある。私はどこまでも私であり、汝はどこまでも汝であって、しかも、私はこの男、汝はあの女として、共に、さらに、互いのために、あるものである。私は、私の対極をなす汝と共に、汝のためにあるものとして私であり、汝も、汝の対極をなす私と共に、私のためにあるものとして汝である。人間は、「他者のための他なる作品」 *opus alterum per alterum* である。故に、人は、他者に対し、男は女に、女は男に、責任をもつ存在者である。

人間における性の意味も、ここにある。性の意味は、まさに、互いに他者のためにある存在の自覚的実現にある、と言わねばならない。逆

に言えば、人は、性を通して初めて、真に他者に出会い、他者と共に、真の自己を実現することが可能になるのである。そればかりでなく、身体的存在における神関係も、この、性における、自己と他者との関係と一つにのみ可能となる。人間の被造性は、人間が性的に規定された存在であることと不可分である。

シッパージェスは、人間の性に関するヒルデガルトの原理的理解を、次の五つの点に総括して捉えている。

1. 性は、人間の根源的な在り方を、*constitutio prima* を、なす。つまり、それは、神秘的誕生 *genitura mystica* である。人間は、原初に、男と女として、世に置かれたのである。
2. 男と女は、愛の絆を結ぶために造られた。それに対する表現が、まさしく、最高度に誠実 *honeste* になされる行為に他ならない。
3. 性的結合の意味は、子孫を残すという生物学的なことのほか、パートナー自身の人間的生命の展開にある。男と女は、まさに「他者のための他なる作品」*opus alterum per alterum* である。人は、他者において、自己実現するのである。
4. 性は、精神の最高の頂きにまで到る。それは、人間の本質をなすのである。「腰に理性の花が開く」*et in lumbis rationalitas floret!* と言いうる。
5. 男と女は、神性の三位一体的生命の写し、似姿である。それは、具体的に、潜勢、欲望、行為の三段階を取って、現実化する。

ヒルデガルトにおいて、性は、人間に付随する属性ではなく、むしろ、本質的なもの、存在論的なものである。確かに、そこにおいて、人間は、植物や動物にもつながる。しかし、同時に、まさにそこにおいて、人間の固有性が現われる。性において、人間は人間に成るのである。

しかも、人間が、ただ男であり、女であるということは、不完全である。それは、性的には、潜勢 *potentia* ないし *fortitudo* の段階である。人間は、男に、あるいは、女に、成るのでなけ

ればならない。思春期において、人間に欲望 *libido* ないし *concupiscentia* が目覚めてくる。しかし、それは、行為 *actus* へ、修練 *studium* へ、と現実化されねばならない。人間が、真に、男に、また、女に、なることが、救いである。それは、この極性をなすものの高次の結合をすることによって初めて可能になる。ここでは、性は、初めから、救いのこととして見られているのである。

ヒルデガルトは、男性と女性の、対極をなす個性を客観化して、しかも、繊細な感性で選別とられた豊かな象徴表現をもって、叙述している。女は弱く、それ故に、しなやかであるが、男の励ましの語りかけを必要とする。男は、生まれつき、守護する者である。求愛し、保護するのは男の方である。男も女も、それぞれ独立な人格として、互いのためにあり、互いを認め、開発し合い、互いに求め、充たし合う。男の方が生産的である。けれども、その、男の創造的な能力も、単に一部分をなすにすぎず、それを完成に導くのは女である。「だが、女は、智慧の源にして全き喜びの泉であり、素敵な持ち分をなす。しかし、これもまた、男が、その創造的な能力によって完成するのである」と彼女は語っている。愛の情熱に燃える男は「荒波の中の船」に、女性の欲情は「燃えさかる山の火」に、そして、男女の愛の関係は、実に、「ツィターの音を耳澄まして聴く」ことに、譬えられるのである。彼女は、さらに、性の行為のプロセスをも、率直かつ詳細に叙述しているのであるが、ここで、重要なことは、そういう個々の叙述の内容ではなく、むしろ、現実を見るまなざし、視点である。性は、どこまでも、実存的な自己生成のこと、根本的な否定を通しての大きい肯定と創造のことなのである。人は、そこで、滅びの生か、永遠の生か、の「あれか・これか」の前に立つ。

男と女の関係が、ここでは、どこまでも、人格的关系において見られている。身体や精神の対照は、男と女が、それぞれ独立な人格として、互いのためにあり、一体となって完成すること

を示している。汝は、愛における、身体的な出会いのうちにのみ、存在するのである。私は、汝と共に、汝において、自己を見いだす。この故に、性愛は、宗教的倫理的なこととして、厳粛に受け止め、事柄に即して、正確に考えるのでなければならない。出会いは、唯一的一度的であり、しかも継続する。ここには、最高度の誠実さ *honestas* が求められる。だから、性と愛と結婚は、一つに結びついているのである。

今日の、情報化され、商品化された性に見られるように、性を愛から、さらに愛を結婚から切り離す考え方は、性の内面への方向を抽象したものである。それは、セックスという現代の神話と幻想によって、性愛の存在の真理とその宗教的倫理性とを見えなくさせ、人間の現実を解体する。学校の性教育も、ごく表面的なことに終始してしまう。

かつて、作家大江健三郎は、自分は、性を語ることによって、いつも、危険を冒していることを承知している、その上で語っているのだ、というふうなことを言っていた。私たちは、ヒルデガルトの場合のように、性が、どこまでも、人間の実存の厳粛な課題として、畏敬をもって受け止められ、非常に真摯な態度で語られた例を、人類の歴史の中で、あまり多く知らない。死と同様に、生の一番根本的なことであり、最深奥の真理を秘める性について語ることは難しい。

性は、決して、単なる、個人の快樂追求のことでもなければ、道徳のことでもない。それは、むしろ存在の真実さ、そこにおける実存生成のことである。人は、そこで、初めて、他者と出会い、自己を越えて、他者と共に生きることを学ぶ。関係において関係を越え、関係を生きる。性は、私たちが、畏敬をもって受け止め、責任を果たすべきもののなのである。私は、汝のためにある私として、汝は、私のためにある汝として、相互にかけがえがない存在である。人が、人になるのは、汝と共に、否むしろ、汝において、である。人は、みな、「他者のための他なる作品」*opus alterum per alterum* である。

9. 人間とその環境

通常、キリスト教的思惟においては、自然の個々の生き物を尊重する態度が欠ける、と見られる。ところが、ヒルデガルトは、被造物の運命の問題を、ちょうど、性の問題の場合と同様に、人間を中心にすえるキリスト教の創造の思想の枠の中で、むしろそれを深めるかたちで、考えている。この思想は、まさしく今日のエコロジーの思想に対応する、と見ることができる。しかし、彼女は、神の被造的世界を、どこまでも、自覚の立場から、つまり、自らの被造性の自覚を離れず、人間の原罪と信仰のこととして、捉えたのである。その点では、彼女のような現実把握の仕方は、今日のエコロジーの思想とはむしろ別次元をなす、と言わねばならない。

身体は、世界の中の存在である。人間は、他の人間と共にありながら、同時に、無数の生きとし生けるものと関わってある。つまり、人間は、「被造物と共にある作品」*opus cum creatura* であり、他の被造物と対話しながら、神の創造を完成すべき存在者、そういう意味で、神の協働者である。

人間は、単に、自己の個人的生活と幸福に対して、自己の救いに対して、責任を有するのではない。彼は、同時に、彼の同胞に対し、また、彼の環境に対し、さらに、宇宙に対しても、責任を有するのである。

ヒルデガルトは、「諸元素の愁訴」*querela elementorum* について語る。

被造物は、全体として、人間に仕えるべく造られた。人間は、神の創造の中心を、その計画の窮極の実現をなす。つまり、神の被造物に働きかけて、神の創造の業を完成するのが人間の使命である。

だが、被造的にして創造的なこの人間と共に、被造物全体が恐るべき現実を経験するようになった。「あらゆる元素とすべての被造物が、嘆きの叫び声を発して、自然に対する冒瀆を訴えている。理性をもたない被造物は、ずっと律法を充たしているのに、哀れな人間は、その短い

生涯において、激しく神に反抗している、と。それ故、自然は、人間に対する恐るべき愁訴をする」と、ヒルデガルトは語っている。

人間は、被造物を造り変える使命を有するのであるが、そこに、根本的に違った二つの態度が現われる。つまり、神に従った在り方か、神に背く在り方か。あるいは、彼の被造性の原点にしっかり立つか、そこから遊離して現実に向かうか。人間が神に背き、自己の被造性の原点から遠ざかりながら被造物に向かうとき、人間自身と共に被造物全体が大きな破局を経験するのである。

かつて、ヨーロッパでは、自然の開発は、人類の幸福を促進するものであり、同時に、人間は、神の創造の歴史を完成していく、と考えられた。二十世紀の中頃でも、例えば、デッサウアーは、人間の技術の発展と工業化をそのように理解している。しかし、現代では、もはや人間の技術による自然の支配の結果を、そのように楽観的に受け取ることはできない。今日、環境保全は、人類の歴史始まって以来の課題になっている。それが、現代世界のあらゆる場所で討論されていることである。そのとき、特に、自然の開発か、保護か、あるいは、経済発展か、環境保全か、さらに、この対立をどのように調停するか、人間と自然の「共生」をどう具体的に現実化するかが問題になる。これまで、無制限な自然開発に裏づけられてなされてきた経済成長にも、制限を設けることが要求されている。地球環境を保護するには、人類の叡智を結集してさまざまな試みをしていかねばならない。それは、重要なことである。

しかし、そういうことと共に、実は、そういうことに先立って、もっと原理的に重要なことがある。それは、環境に向かう人類の姿勢そのものである。世界の中にあり、世界に向かって、人間は本来いかにあるべきか。人間は、自己の身体と自他の関係を支配し、意のままに変革することはできない。同様に、人間は、自己が立っている場所、世界、環境を支配し、変革することはできない。それは、私たちが立っている

ところであり、私たちをあらしめているものであるから。身体や関係性と同様に、私たちは、環境に対し、実は、畏敬と責任の姿勢をもつべきである。

今日のエコロジー運動の問題点は、いろいろある。一番根本的な問題点は、そこで人間主体そのものの在り方が問われていないということである。人間主体の根本的問題性を問わないかたちで、むしろ、それから逃避するかたちで、環境保全を語り、追求する。簡単に言えば、主体が、自らを立たしめている自然環境に自ら背き、対立し、それを支配せんとする姿勢を維持しながら、自然環境の保全をしようとする根本的矛盾のところに問題があるのである。それは、環境破壊の問題として現われた現代のニヒリズムの問題である。

ヒルデガルトの場合、環境が問題になるのは、癒しと救いが、単に個人のことでなく、世界全体の、世界の生きとし生けるもののことだからである。被造物の苦しみは、私の苦しみである。「あらゆる元素とすべての被造物が、嘆きの叫び声を発する」という、その愁訴の声は、実は、ひたすら癒しと救いを求める私自身のうめきの声でもある。

10. ヒルデガルトの思想と現代

二十一世紀、あるいは、西暦二千年代への変わり目にあって、私たちは、人類を導く基本的ヴィジョンを考えなければならないところにある。

客観的には、世紀が変わるといっても、そう特に新しいことが起こるようにも思われない。来たるべき世紀に、科学と技術がもっと発達することは確かであり、多くの人は、そこに夢を託す。きっと、月ばかりか、火星にも人が往復したり、開発をしたりし始めるであろう。あるいは、話をするときすぐそれが文字になり、さらにすぐ外国語に翻訳される機械が発明されてたいへん便利になるであろう。あるいは、また、人工臓器が発達して、臓器移植の問題が解決するであろう。

しかし、そういうふうになり便利になっていって、社会がずっと良くなるか、ということになると、たいいてい、おそらく今より良くなるはならないだろう、むしろ、ますます生活が困難になるだろう、と、悲観的な意見になる。技術の進展により、環境がいよいよ破壊され、貧富や民族の対立が激化し、さらにエイズなど、根治不可能な種類の病気が拡がって、人類は決して今より幸福にはならない、それどころか、人類は滅亡するかもしれない、と心配する。過去の諸世紀の画期的な事件の結果、例えば、十八世紀の産業革命やフランス革命など、あるいは、今世紀前半のロシア革命や後半の技術革新の結果の経験からしても、今日、次の世紀をユートピアに一步近づいた世紀と見ることは、到底できなくなっている。人類は、これまで、確かに、いろんな問題を解決してきたけれども、問題の解決は、常に、新しい、はるかに大きな問題の惹起を意味した。

こうして見ると、今、二十一世紀に対し、ともかく、いろんな立場からの、いろんな予測や提言がなされているのであるが、どうも、ヴィジョンの責任ある提起は欠けているようである。物語の終焉、イデオロギーの終焉の時代には、いろんな小さな物語が生まれている。そして、思想そのものが、もはや、情報を道具にした単なる知的ゲームになってしまっていて、自己と歴史の根本原理を問うものでなくなっている。人々は、行為の基準を単に個人の自己実現に、しかも、いかにして競争に勝って幸福を獲得するかに置く。しかし、ほんとうは、この時代にこそ、確固たるヴィジョンの提起が必要である。多元性を志向している世界であるが、実は、むしろ、多元的世界を可能にする世界の指導的ヴィジョンが求められているのである。個人や党派の集団の小さな権利の主張でない、むしろそれを越えた、人間と世界のほんとうの在り方が問題になる。

ここで私たちが取り上げたヒルデガルト・フォン・ビンゲンの思想は、何といっても、十二世紀のヨーロッパの思想である。この思想がい

かに深いものであっても、私たちは、その後の、ルネッサンスから産業革命や政治革命を経て、二十世紀の終りの今日に到る科学技術と社会の発展の歴史を無視することはできない。だが、現代までのヨーロッパ文明の発展の起点を、ギリシア・ローマや原始キリスト教でなく、十二世紀に、北イタリアやフランスに大学が作られ、トマスに代表される神学の体系が成立したところに見いだすこともできる。この、ヨーロッパの大学が他と違うのは、学問の分化が起こったことである。つまり、そこで、イスラムで一体をなしていた、哲学と医学、法学と神学が、それぞれ分かれて、四学部制で研究がなされるようになった。そこから、医学を哲学から独立に、宗教や世界観の問題から切り離して、純粋に経験的な学問として研究する道が、そして、ルネッサンスやデカルト主義を経て、二十世紀の現代に到るまでの長いヨーロッパ近代の学問の発展の可能性が、開かれた。ヒルデガルトの思想は、まさに「その前」なのである。ここに、この思想の特別な今日的意義がある。

これまで人類をずっと導いてきた考え方は、科学技術の進歩により、自然を支配することを通して、人間がみな、自由に、そして幸せになれる、ということであった。科学技術の進歩が動因となって人類が向上し、それが原因となって、人類が救われる、という因果関係への信が、文明の自明な前提をなした。しかし、今は、その、科学即向上即救済の信の前提を問い直さなければならない。例えば、医療を考えても、遺伝子治療や臓器移植がなされる時代にこそ、ここからだ、そして、救いと癒しとが一つであるような視点が、やはり根本になるのである。なぜなら、人が癒され、充実して生きるということは、決して物理的処置だけで片づくことではなく、本来、それとは別のことだからである。現代の大きな問題になっている性や環境の問題にしても、人間の自覚、自己存在の根拠への覚醒があって初めて解決できることである。否、むしろ、性も環境も、実は、私たちの真の自己充実のこととしてある。ヒルデガルトは、この

ことを明らかにしている。世界が、ミクロにおいても、マクロにおいても、分裂し、およそ統一的に見る視点を失った時代、二十世紀ばかりでなく、一千年代全体を批判的に検討しなければならない時代にあって、この孤高な十二世紀の一預言者の、大きな全一的な世界とそこの中の人間の位置の思想は、その厳しい人間批判と共に、計り知れない重要性をもっている。

文 献

Texts:

a. Translations into modern german

- 1) Wisse die Wege. Scivias (Böckeler, M., übers.), 2. Aufl. Otto Müller, Salzburg, 1954
- 2) Welt und Mensch. Das Buch: De operatione Dei (Schipperges, H., übers.). Otto Müller, Salzburg, 1965
- 3) Der Mensch in der Verantwortung. Das Buch der Lebensverdienste (Schipperges, H., übers.), 2. Aufl. Otto Müller, Salzburg, 1985
- 4) Heilkunde. Das Buch von dem Grund und Wesen und der Heilung der Krankheiten (Schipperges, H., übers.). Otto Müller, Salzburg, 1957
- 5) Das Buch von den Steinen (Riethe, Peter, übers.), 2. Aufl.. Otto Müller, Salzburg, 1986
- 6) Naturkunde. Das Buch von dem inneren Wesen der verschiedenen Naturen in der Schöpfung (Riethe, Peter, übers.), Otto Müller, Salzburg, 1959
- 7) Lieder (von Barth P. Ritscher, M. I. Schmidt-Görg J., hrsg.). Otto Müller, Salzburg, 1969
- 8) Ordo Virtutum. Spiel der Kräfte. Das Schauspiel von Tanz der göttlichen Kräfte und der Sehnsucht des Menschen (Koneremann, Bernhard, hrsg.). Pattloch, Augsburg, 1991
- 9) Briefwechsel (Führkötter, Adelgundis, übers.). Otto Müller, Salzburg, 1964

b. Anthologies

- 1) Gotteserfahrung und Weg in die Welt (Schipperges, H., hrsg.). Walter, Olten, 1989
- 2) Gott sehen (Schipperges, H. hrsg.). Piper, München, 1985 (Taschenbuchausgabe von 7.)
- 3) Die Liebe hat in der Ewigkeit ihr Zelt (Ligendza, M., hrsg.). Butzon & Bercker, Kevelaer, 1988
- 4) Quellen des Heils (Führkötter, A., hrsg.). Otto Müller, Salzburg, 1982

Studies:

a.

- 1) Schipperges, H.: Hildegard von Bingen. Ein Zeichen für unsere Zeit. Knecht, Frankfurt, 1981
- 2) Schipperges, H.: Die Welt der Engel bei Hildegard von Bingen. Otto Müller, Salzburg, 1979
- 3) Führkötter, Adelgundis (hrsg.): Kosmos und Mensch aus der Sicht Hildegards von Bingen. Verlag der Gesellschaft für Mittelrheinischen Kirchengeschichte. Mainz, 1987
- 4) Bungert, Alfons: Die heilige Hildegard von Bingen. Echter, Würzburg, 1979
- 5) Ulrich, Ingeborg: Hildegard von Bingen. Mystikerin, Heilerin, Gefährtin der Engel. Kösel, München, 1990
- 6) Newman, Barbara: Sister of Wisdom, St. Hildegard's Theology of the Feminine. University of California Press, Berkeley, 1989
- 7) Flanagan, Sabina: Hildegard of Bingen, 1079-1179. A Visionary Life. Routledge, London, 1990

b.

- 1) シッパーゲス, ハイノリイッヒ: 中世の医学 (大橋/浜中他訳). 京都: 人文書院, 1988
- 2) 石井誠士: 直視の世界 ヒルデガルト研究序説 (一). ブディスト 1992; 40: 13-23
- 3) 石井誠士: 直視の世界 ヒルデガルト研究序説 (二). ブディスト 1992; 41: 16-31